WEP 俳句通信

ウエップ俳句通信 VOL.73

特別作品25句●黛　執「うぶすな」

特別企画●【座談会】虚子『六百句』を読む
小宅容義・阪西敦子・坊城俊樹

山﨑千枝子100句「風岬」

【実力作家20句】
尾池和夫「春隣」

【短期集中連載②・新作30句】
木内憲子「鳥風」

特別寄稿
山口誓子とスキー
「長袋先の反りたるスキー容れ」再考
米田恵子

●作品●
田中水桜・神蔵　器・山下美典・
友岡子郷・落合水尾・西村和子・
池田澄子・中澤康人・大橋　晓・
寺井谷子・今井　聖・井上弘美・
山田佳乃・廣瀬町子・林三枝子・
宮谷昌代・荒井千佐代・
辻内京子ほか

●好評エッセイ●
先人に学ぶ俳句「阿波野青畝(7)」岸本尚毅
戦後の俳人たち「林翔」松岡ひでたか
新連載・俳句とともに「富士山」井上康明
虚子の肖像「再びの朱鳥世界」坊城俊樹
文学エッセイ——放浪のかたち「傷口は光る　吉原幸子再び」酒井佐忠
楸邨を求めて「楸邨と『内部生命論』」神田ひろみ
誓子の素粒子「開業祝いの色紙」品川鈴子
森澄雄の背中「その出自(母方の履歴)」千田佳代

秩父・宇根の春まつり

写真／長谷川新三

特別作品25句

うぶすな

黛　執

うぶすなの星にぎやかに去年今年

年の湯や遠く流るる風の音

音立てて上がる藁火や寒の入

寒さうに暖かさうに雪の村

狐火の囁き合つてゐるやうに

大寒の出刃に当てたる指の腹

特別企画

座談会 虚子句集『六百句』を読む

出席者　小宅容義・阪西敦子・坊城俊樹（アイウエオ順）

すでに古典となっている虚子句集『六百句』を現在、坊城俊樹氏たち「ホトトギス」系の若手が何年かをかけて読みなおしています。そこで、その中心で読みをすすめている坊城氏とお二人のゲストをお招きし、あらためて『六百句』を読んでいただきました。

超結社句会／新12番勝負

前列右から　吉岡氏、福井氏、前澤氏
後列右から　星野氏、冨田氏、藤本氏

ゲスト　冨田正吉・福井隆子
　　前澤宏光・吉岡桂六
ホスト　星野高士・藤本美和子

編集長　超結社句会の18回目です。ゲストは、「朝」同人の冨田正吉さん、「対岸」同人の福井隆子さん、「山暦」副主宰の前澤宏光さん、「かつしか」主宰の吉岡桂六さん。ホストは「泉」副主宰の藤本美和子さん、「玉藻」副主宰の星野高士さんです。遠慮のない意見交換をお願いいたします。

高士　それでは高点句からいきます。5点の、

　毛氈の端余りたる雛祭　　（藤 宏 正 桂 高）

　この句は今日の最高点です。

隆子　「毛氈」と「雛祭」というと、ちょっと付き過ぎかという感じがしましたが、毛氈の端が余っているというところに意外性があり、あっ、こんなところを捉えて雛まつりを詠んだのねえ、と思えて、新鮮に思えました。

宏光　福井さんと同じなんですが、雛壇と毛氈は一体なんだと思います。その毛氈の端に目をつけたところがいいなと思います。

桂六　華やかな雛まつりのなかで端の余った毛氈があるなんて、微妙なものを感じさせて面白いですね。

正吉　最初は通り過ぎてしまった句なんですが、よくよく考

春疾風の三浦半島をゆく

第49回超結社吟行

2月に入って「天項」主宰の波戸岡旭さんから「超結社の吟行をやりませんか」と電話がありました。それで3月7～8日の1泊2日で行うこととし、行き先や宿の手配を波戸岡さんにお願いすると、すぐに行く先は三浦半島、宿は「しがくのやど・葉山相洋閣」との連絡が入りました。そして、3月7日の午前中にJR逗子駅前で落ち合おうとのこと。「天項」の人たちは自分たちの車で参加するとのことでした。

そこでウエッブの車は8人乗りですので、メールを使って先着順6人の参加を呼びかけたところ、「清の會」の下鉢清子主宰、同人の原瞳子さん、椿照子さん、わたし(大崎紀夫)が主宰する「やぶれ傘」から安藤久美子さん、藤井義晴さんの申し込みがすぐにあり、8人乗りの車は満員ということになりました。

そして3月7日の日。例によって長谷川新三カメラマンの運転する車でJR埼京線の戸田公園駅前を朝の8時に出発して、10時半に逗子駅東口前に着くと、すでに波戸岡さんたちの車が2台待っていてくれました。

「天項」からの参加者は、波戸岡主宰、同人の飯田角子さん、小野原雅子さん、崎田みさ子さん、高塚一枝さん、吉田光政さんの6人の人たちで、合流するとすぐに葉山町の海辺にある「しおさい公園」に向かいました。